

河原井さん
根津さんらの

「君が代」解雇をさせない会 都庁前通信

「『君が代』で分限免職をするな」と 都教委にあなたの声を届けてください

19日に河原井純子さんの勤務する八王子東特別支援学校の卒業式があり、『君が代』斉唱時に彼女は確信を持って起立を拒否しました。明日24日は、根津公子さんが勤務するあきる野学園の卒業式です。彼女も、起立を拒否します。

2人は、「君が代」の強制によって〈人権と民主主義〉を教えるはずの学校で、それとは反対の、他国に憎悪感情を抱かせる〈愛国心〉と考えずしての〈命令と服従〉が子どもたちに教えられていくことに危機感を抱いています。

自分の考えどおりに起立を拒否する教員はわずかかもしれませんが、教員の多くが「日の丸・君が代」の強制と処分は問題だと思っています。



漫画：巻花花 <http://18787.main.jp>

■都教委は分限免職を考えている

昨年7月に都教委が策定した「分限事由に該当する可能性がある教職員に関する対応指針」（「分限対応指針」）には、・職務命令を拒否する ・非違行為を行ったにもかかわらず再び非違行為を行う ・研修を受けたにもかかわらず、その成果があがらない などの場合、分限処分（降格、休職、免職）にすることができるという規則です。昨年根津さんの懲戒免職に失敗した都教委は、今年はこの「分限対応指針」を使って、不起立を続ける2人を免職にしようと考えているようです。策定直後の今の段階で「君が代」不起立を続ける教員に使わなければ、この事由を作った意味がなくなってしまうから、何とかして、これを適用させたいはずなんです。

今回2人にこれを適用させたら、次には病気を抱える人、家庭の事情で休暇をとることが多い人がそのターゲットにされていくでしょう。また、大阪の橋下府知事が『分限処分』を活用して免職や降格の処分を行う考えを示したように、公務員も一旦首切りして、非正規雇用を進める合理化方針があがっています。

皆さま、都教委に至急、「河原井さん・根津さんを分限免職にするな。処分は止めろ」と声を届けてください。処分を決める教育委員会定例会は通常でしたら木曜日、26日に行われますが、30日も聞いています。

- 東京都教育委員会 人事部サービス課（処分担当） TEL 03-5320-6792
- 人事部職員課 TEL 03-5320-6790 FAX 03-5388-1729
- 総務部教育情報課 TEL 03-5320-6733 FAX 03-5388-1726

河原井さん・根津さんらの君が代解雇をさせない会

国立市北1-1-6 コーポ翠1階 多摩教組気付

電話：042-571-2921 ファックス：042-574-3093

ホームページ <http://homepage2.nifty.com/kaikosasenaikai/>

卒業式を直前に思うこと

根津公子

24日は私の勤務するあきる野学園の卒業式です。わずか半年のお付き合いでしたが、私も卒業する生徒たちとの付き合いを振り返りながら、彼ら彼女らの卒業をお祝いすることに専念したいです。しかし、「日の丸・君が代」の子どもたちへの強制と自身の処分の現実を前に、これに立ち向かわねばなりません。教育に反する擦りこみに子どもたちを差し出すことはできませんから、当然のこと今回も、「日の丸・君が代」の強制に反対し、「君が代」斉唱の際には起立はしません。

「日の丸・君が代」の強制が、考えずに上の指示に従う人間を、そして、安価な労働力とされてもそれは自己責任と諦め、「北朝鮮はひどい国、日本人でよかった」と他国に憎悪を募らせる「愛国心」で心の安定を図り、不平を言わない人間をつくることにあること、それが、経済の破綻の中で恐ろしいほどによく見えてきた1年でした。新年度から教員免許10年更新制が入ると、今私たちがしているように教員が抵抗することは、今とは比べようもなく困難を伴うことになり、ますます、子どもたちがお国のロボットにされることは目に見えています。教え子や我が子のこと、若い教員たちのことを考えると、犠牲は払ってもたまたか抜こうとの思いが突き上げてきます。

国旗国歌法成立から10年、スポーツの世界や卒業式・入学式に「日の丸・君が代」があることが「当たり前」になってしまった現実の中で、子どもたちはそれに疑問を持たずに育っています。教員の多くは「日の丸・君が代」の強制に心では反対しているのですが、その心のうちは子どもたちには見えません。黙していれば、力の強い側、数の多い側に賛成していると見られるものです。子どもからすれば、「先生たちは皆『日の丸・君が代』に賛成している」と映ります。そういう中で、私は2006年度生徒たちから、「なぜ、根津だけが反対するのか。ルールを守れないなら教員を止めろ」と言われました。生徒たちは、周りの大人たちを見て、かつての「少国民」に育ったのです。とりわけ、教員たちの沈黙は、生徒に「大本営発表」を伝え

信じ込ませる役割となっています。教員は、すでに「教え子を戦場に送る」ことに加担しているのです。その現実を直視し、自己と向き合わなければならぬと思います。

この点で、私たちの大先輩であられる北村小夜さんの体験は、私たちに大きな示唆を与えます。小夜さん（といつものように呼ばせていただきます）は、1925年生まれ。女学校の生徒であった時に先生から戦意高揚のポスターを描いて来るよう頼まれ、閃いたのが、肉挽き機に上からチャーチル・ルーズベルト・スターリンを入れ、下から血肉が出てくる図案だったという。それを描いて意気揚々と登校し先生に見せると、先生は、一言もほめずに机の下にしまわれたそうです。

「何で先生はほめてくれなかったのか、わからなかった」「その先生は、きっと戦争に反対だったのだろう。でも、言ってくれなかったから分からなかった。その時言ってくれていたら、私は軍国少女にならずに済んだ」。そう小夜さんはおっしゃいます。小夜さんのことは、今の私たちへの“黙るな”メッセージです。戦中は「戦争反対」を言えば特高に連れて行かれたわけですが、今はまだ、そんな心配はないのです。

もしも、今はまだ戦前でも戦中でもないと思っていられしやる方には、次の体験を考えていただきたいと思います。私にも、もしも学校で先生が教えてくれたら、と残念に思うことが2つあります。その一つは、女性の生き方についてです。農家でいつも忙しい家に生まれた私は、女性雑誌などを通して専業主婦＝良妻賢母はあこがれでした。学校が（数少なかった女性教員たちが）それについて授業で考える機会を提供してくれていたら、私だって考えられたのに、もっと早くその間違いに気づいたのと思うのです。戦争中だけでなく平時でも、教員たちが黙っていることの罪は甚大だということです。

私は「君が代」で起立できない気持ちを生徒に話したうえで、卒業式には着席します。